

二〇一四年五月二七日、日本学士院と本研究所の共催により、「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催した。今回の研究集会は通算一四回目となり、ロシア・サンクトペテルブルク市からロシア国立海軍文書館セルゲイ・チエルニャフスキー館長、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員らを招聘して御報告をいただいた。当日は三つの報告があり、ロシアから招聘したお二人はいずれも琉球に関するロシア海軍の史料を紹介して分析した。チエルニャフスキー館長は、一八二〇年、露米会社のボロジノ号が大東島を「発見」し、ボロジノ諸島と命名するなど、これまであまり注目されなかった琉球周辺でのロシア海軍の活動を論じた。次に、クリモフ上級研究員は一八五四年のプチャーチンによる琉球訪問について、ゴンチャロフ、ペッテルハイム、そしてポシエットの記述等を駆使して論じた。海軍文書館が所蔵する海軍士官ポシエットの手帳の存在が初めて明らかになっている。最後に、新潟大学麓慎一教授から、明治初年の外務大臣副島種臣との交渉を記録したロシア側史料を通じ、樺太や朝鮮、台湾の問題が日露交渉においてどのように関連していたのかが具体的に論じられた。いずれの報告もきわめて刺激的な内容で、約六〇名の参加者による活発な議論があった。

この研究集会の実施にあたっては、クリモフ上級研究員から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

(プロジェクト代表/保谷 徹)

琉球諸島におけるロシア海軍軍人たち

セルゲイ・チエルニャフスキー

リケイ諸島は現代的な言い方では琉球諸島という。ロシアの歴史学史、史料研究史にこれらの島々についての情報が出現し出すのは、ようやく、一八世紀末から一九世紀初頭である。通常それらは、ロシア軍艦の日本沿岸および露領アメリカ沿岸への航海の訓令や報告の中に言及されている。

後年、一九世紀の半ば頃から、ロシアでは、琉球諸島に関する情報を含む翻訳作品、一般向けの科学書物、さらには文学作品が出現し、二〇世紀初頭に至るまでのロシアの史料では「リケイ諸島」の名称で記述されている。琉球諸島に対する言及は、一九世紀のロシアの教育的文献や

参考書籍にも見出せる。これらの島々については、一八九〇―一九〇七年サンクト・ペテルブルグで発行されたブロックハウス・エフロンの百科事典にも記載されている。以下多少省略しながら引用する。

「リケイ諸島、あるいは、リウーキウ(「リウーキウ」でも「リ」を「L」ではなく「R」とするもの、「リエウーキイエウ」、「リエーツイユー」等、ロシア語での表記の仕方は種々ある)とは東アジアにある諸島。全部で五五島、面積二四二〇平方キロに及ぶ。琉球諸島は三つのグループに分けられ北部、あるいは、しんぼこ諸島は一六島からなり、最も大きいものが奄美大島、中部、あるいは、中山諸島は、列島中、最大、面積

一三四八平方キロの沖縄島を含み、南部、あるいは、山南諸島は、その中で大きいのは石垣島で二四六平方キロある。琉球諸島は山がちではあるものの、特に沖縄島、あるいは、大琉球は、耕地にも庭園にも適する。気候は快適。主たる産物は、さつまいも、サトウキビ、米、タバコ、綿花、紙の原料くわ科植物。住民は（一八九三年で四一〇、八八一人）、最上流階級では、体つき、言葉、風習は日本人に属するといえるが、下層階級ではむしろ中国人に近いといえる。平和的で、労働を愛する民族である。仏教、神道が信仰されているが、さほど重要視はされていない。最も知られた貿易港は沖縄島の最南端那覇で、遮蔽性に優れた湾の奥にあり、住民は四二、二五〇人。当地から街道四キロ半で守里へ、この町は琉球王国の前首都で、人口二五、六〇四人。

その地理的位置から、琉球諸島は常に中国と日本の間の不和の原因となってきた。どちらかといえば常に日本に引き寄せられてはいたが、東洋すべてにおいて支配的であった中国文化が影響を与えたことは言うまでもない。一五九五年薩摩の大名と琉球国王の間に諍いが生じた。琉球国王は日本人に贈り物をするようになったが、それは朝貢品となっていた。一六〇九年国王は日本人に捕らえられた。そして、日本を正式に群島の上位権力と承認した。しかしながら、この後も、琉球諸島の住人は、北京への従属関係を維持していた。一七九七年のプロートン、一八一六年のマックスベリ【マレー・マックスウェル (Murray Maxwell)、アームスト使節団フリゲート艦アルセスト号艦長】とバジリ・ガリー【ベイジル・ホール (Basil Hall)、同使節団スloop艦ライラ号艦長】⁽¹⁾の遠征の頃から、あらゆる国の航海者たちが琉球諸島を訪れた。一八五四年、アメリカ提督ペリーは、それまでヨーロッパ人や北米人が使うことのできなかつたそのすべての港を自由に使う権利を琉球諸島の政権から獲得した。一八七二年琉球王は退位し、一方、琉球諸島は日本

を構成する一地方として日本の版図に編入された。⁽¹⁾

この情報は全体的に、琉球諸島の地理や自然の特色、経済、風俗、政治体制、歴史について、なんらかの知識を与えてくれる。ただし、これらの情報はすべて、百科事典の記事執筆者が当時入手できる根拠から引き出されたものと言わざるを得ない。

琉球諸島に関する翻訳諸文献については本稿では触れないこととし、主としてサンクト・ペテルブルグのロシア国立海軍文書館の学術参考書庫およびフォンドに保存されている史料と文書を中心に、以下、論考を進める。

露米会社船が露領アメリカ沿岸へ航海した時、さまざまな理由で、当時はほとんど知られていない太平洋の島々や群島をしばしば訪れた。琉球諸島についての初期の言及のひとつが、一八〇三年七月一日日皇帝アレクサンドル一世により裁可された「露領アメリカへの航海に関するN・P・ルミヤンツェフのN・P・レザノフに対する訓令」の中に見られる。

「航海の途中、レオケイ(リケイ、チェルネフスキー注) 諸島のひとつウスマリチョン島で、偶然ロシア人に遭うようなことがあるかもしれない。ベニオフスキーが語っていることによると、あるいは、必ずしも、正しくないかもしれないが、彼と共に逃走した八人のうちの中の一にラブチェフという名の者がおり、その島に自分の意思で居残っているということである。また、ウスマリチョン島の北方にあるベリリング島で同じくベニオフスキーの話で知られているオホーチンに出会うかもしれない。いずれの場合も貴下は、皇帝の名において彼らを救し、皇帝に対する忠誠心を彼らに求めることができる。さらには、我が国の交易活動とその前途に今後彼らが寄与するならば、皇帝の恩寵を約束することもできる」⁽²⁾

この文書には、スロバキア・ハンガリー出身の冒険家モーリッツ・アウグスト・ベネフスキー（ベニオフスキー）の日記の引用がある。ベニオフスキーはポーランドでのオーストリア政権の追跡から逃れ、反ロシア蜂起に加わったために、カムチャツカに流刑になった。当地で一七七一年四月ベニオフスキーは行政当局に対する反乱を起こし、拘束された者、その他、政権に不満の者の逃走の先頭に立った。ガリオット船聖ピョートル号で、逃亡者たちはまずマカオに至り、その後、商船でマプリキール島に到着した。冒険の参加者のうち何人かはロシアに戻り、一方、ベニオフスキーは後年フランスの軍事遠征の先頭に立ち、マダガスカルを確保しようとしたが、一七八六年五月同島を占領しようとする二回目の試みが失敗した際に死亡した。回想録が残されており、その中には、琉球諸島に滞在したことも記されている。もともと、彼の回想録が信じられるかどうかという問題は残されたままではある。

後に、一八〇四年九月、海軍次官P・V・チチャゴフ中将はアレクサンドル一世宛の自己の報告書の中で、N・P・レザノフ侍従武官の依頼を書き記した。ここにも琉球諸島についての言及がある。

「もし何らかの不幸な情況により、彼が来年一八〇五年九月に港に戻らない場合には、皇帝陛下のご命令を得、ただちに、能力の高い海軍士官が指揮する輸送船を派遣する。同船は、カムチャツカからクリール諸島近辺を経て日本まで、彼が長崎に向かう経路としたデイスメン海峡方面へ向けて、その航海を追跡し、また、琉球諸島付近でも彼を探索することになる。」⁽³⁾

『皇帝陛下の侍従レザノフのカムチャツカから日本への旅日記』一八〇四年八月から一〇月の中には次のような記述がある。

「諸島間をトゲルンズル [topawcens (topgallant-sail)] トップゲルンズルとも。下から三番目のマストであるトゲルンズル (topgallant

mast) に付ける帆ではあるが、ロワー (lower) とリアッパー (upper) と上下あることもある」を展帆し航海【実際には「トゲルンズルの風で航海」と書かれている。風はさほど強くないことになる。】「九月二二日部分」。タノ島を通過、琉球諸島は左側にある、緯度は観測では三一度九分三七秒、経度は二二九度一三分。【九月二三日部分】⁽⁴⁾
海軍文書館の学術書庫に保管されている、一八〇三—一八〇六年I・F・クルーゼンシュテルン指揮下のロシア初の世界周航記に、次のような記述がある。

「我々の長崎滞在中、当地に朝鮮、あるいは、リケオ諸島(リケイ諸島、チエルネフスキー注) からの船は一艘も来なかった。それらが近いにもかかわらずである。それらの地域と日本との通交はある時期から完全に途絶えた。このことについては、我々の出発前に使節に宛てられた書簡の中でも何度も言及されている」⁽⁵⁾

ゴロウニンの手記の中にも琉球の記述がある。

「今から二百年前、朝鮮人と琉球諸島の住民は日本人に征服され、自分たちを日本民族の属国だと認め、かつ日本に年貢を払うことを約し、現在に至るまで、日本皇帝たちは、きちんと受け取っている。この貢は、日本人の言葉では、極めて僅少とのことだが、もし、日本の歴代の皇帝がそのことを続けているとしても、それは、利益のためではなく、一方で、支配と権力、他方で恭順と従属の確立のためである。(中略)

琉球諸島の住民に関しては、朝貢民というより、日本皇帝の臣下と言った方がいい。というのも、彼らは自分たちの領主あるいは国王、信仰、独自の教主【教会の首長】とある】を持ち、自分たちの法により支配されているが、これはすべてただ通常の秩序と事項の流れにおいてのみで、一方、何か決議を導入したり、あるいは他国人と外交・通商関係を持つ場合には、日本政府の意向なしには何一つなしえないのである。

日本人が我々に話したところでは、琉球の人々は、彼らが住んでいる島の面積から判断するに人口は多く、住民は極めて善良で大人しく、臆病である。彼らは、日本人というよりも、むしろ中国人に似ている。言葉も中国語に似ている。それらの諸島は日本や中国に特有の多くの植物を産する。日本人は琉球人とは金属製品、漆器、塩干魚、昆布、オランダ人からのヨーロッパ商品、中国製品で交易し、一方、琉球人からは、茶、タバコ、絹、綿布、及び、少量の自家製手工業製品を買っている」

琉球諸島に関して最も頻繁に言及されているのが、日本への外交使節である侍従武官で海軍中将E・V・プチャーチンの一八五二年から五五年の文書類の中である。一八五五年二月日露間で下田条約が締結されたことを以て終了した外交任務そのものに関しては、多くが記されている。それに対して、プチャーチン艦隊の航海の詳細の一部はあまり知られておらず、その中には、一八五四年琉球諸島に立ち寄ったことも含まれている。それだけに、これらの日露関係史においてはあまり知られていない出来事に光を当てる史料を参照することは極めて興味深いだろう。

海軍元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公宛の一八五四年二月二七日(三月一日)付け軍務報告書の中で、プチャーチンは次のように記している。

「マニラに向かう途中、スクーナー艦と合流するため琉球諸島ナパキアング(今日の那覇、チェルネフスキー注)港に立ち寄った。同艦は私に十一月二十五日(十二月七日)付けのヨーロッパからの知らせを届けてくれた。その知らせを承けて私はマニラに急行した。

ナパキアングで私は、ペリー提督がこの港を自分の艦船のための集結地と指定し、我々の到着の二日前出立したこと、三隻の蒸気艦、すなわち三隻のコルベット艦と一隻の輸送艦とともに再び江戸に向かったことを知った。ナパキアングに残した部下の將校を通してペリーは、合衆国

が日本に持っているある種の不満により琉球はアメリカ人により占領されたことを宣言し、現在、ナパキアング投錨地付近では、石炭やその他の備蓄品の倉庫、および彼らによって建てられた病院を保全する米国旗が翻っている…。ナパキアングを去るに当たって私は、スクーナー艦ボストーク号の艦長に、外務省からの私への文書に言及されているボロジノ島をまず監視し、その後、艦隊に合流するためにマニラに向かうよう命じた。」

ところで、プチャーチンが自分の軍務報告書で言及しているボロジノ島であるが、これは、琉球よりも東に位置しているボロジンスキエ諸島沖縄県に属している。この小さな、かつては無住であった島々は、一八二〇年、露米会社船Z・I・パナフィン中佐【中佐は最終職階。当時中尉】指揮下のボロジノ号航海時に発見された。露米会社幹部等宛の一八二一年一月二六日付書簡で艦長は自己の発見を次のように伝えた。

「マニラからアメリカ北西海岸への航海時、二つの発見に成功した。

昨年八月二〇日、穏やかな北西の風のもと、水平線はやや薄暗く、夜が明けてまもなく、まっすぐ北の方向に、低い砂岩質の島を発見。島の長さは西から東に約一〇マイル。風の状態が許す限り、島に近づいてみた。島の緯度は、観測された艦の位置から決定…。経度は、マニラで正確さを確認済みの三つのクロノメーターにより測定…。

正午過ぎてまもなく、同じ風で島の側を航行し続けたところ、同島から北北東の方向に別の島を発見、見た目は最初の島と同じ、距離はそれから一二マイル離れている…。

古い地図にも新しい地図にも、近辺の海域を航海した有名な航海家の旅行記にも、この海域のこの場所に何らかの陸地の存在を窺わせるようなものを発見できないことから、私はこの二島を我々独自の発見に帰す

ることとし、それゆえ、島に艦の名前を付けた。名づけてポロジンスキエ諸島⁽⁸⁾。」

海軍文書館には、フリゲート艦バルラダ号の航海参加者のひとりの興味深い文書が残されている。その名前は残念ながら、確定できなかったが、琉球諸島ナパキアング港に向けて近づいていく時のことが記されている。

「ナパキアングに近づく際には、海際の暗礁に注意をむけなくてはならない。それらは、良い天気の日でも、砕け波でそれと分かるとは限らない。そのような場合には、確認のために小艇を遣わす必要がある。西から近づく場合は、高いアマカリマ諸島のグループの中の北西の島と、北緯二六度一五分にある緑に覆われた低い小島の間を通り抜けなくてはならないが、その島から北の方かなりの距離にわたる暗礁と浅瀬を確認した。この島を通過すると、「暗礁島」から少なくとも一マイルは離れた上で、針路を東に保たなければならぬ。

琉球島それ自体の海岸に近づくとき、まず目に入るのが、目を見張るばかりに鬱蒼たる森林の岬で、その上には城砦かカトリック僧院の廃墟を思わせるような岩がいくつ突き出ている。この岬は碇泊地の南端に位置し、碇泊地の北西端の反対側を西へ向かって、かなりの距離を突き出ている。岬に近づくにつれて、碇泊地は湾の南端に開け、碇泊地が見えてきたら、碇泊地に向けまっすぐ針路を取らなくてはならない、少なくとも半マイルはAbbey Pointを通過しなくてはならない。入り口の暗礁の南端と岬の間に来たら、針路をRohvに取らなければならない。入り江の南端には尖塔に似た素晴らしい岩がある。投錨に入る際には、この岩より北東方向に四分の三マイルの所にある長い「珊瑚礁砂洲」に突き当たらないようにするために、針路を南南東に向けかつ半マイル距離を置くのが最良のやりかたである。

碇泊地のもつと奥に入ることはできるが、暗礁の先端に小艇をやらなくてはならない。そのことは、碇泊地に導く二つの他の水路を通り、暗礁の間を碇泊地に入る際にも必要なことである。：ナパキアングの方に向かうにはバリ：「単語のうち一部しか解説できず」の意味。名詞に相当する単語が推定される」に入り込むのがよい：、その際、暗礁に注意して、湾に注ぐ二つの小川の河口の真向かいに停泊するのがよい。

(NB) 琉球諸島および我々がそこを通過したバシ・ボクンク諸島は、英国人が測量したが、正確とは言えず、それゆえ、英国地図を盲目的に信頼することはできない。⁽⁹⁾」

この文書は極めてわかりづらい字で書かれており、それゆえ、解説に成功していない箇所は「：」で表示した。

琉球諸島、特に、ナパキアング港をロシア艦船が訪れたことについてのさらなる詳細は一八五六年の『海軍雑誌』【Морской сборник】に掲載された「プチャーチン伯の皇帝陛下への忠順なる報告書 ロシア海軍艦隊の日本および中国への航海 一八五二―五五年」の中で言及されている。

「二月二四日、フリゲート艦バルラダ号とコルベット艦オリブツァ号とともに長崎を出港、スクーナー艦ボストーク号は、日本から南に四五〇マイルに位置する琉球諸島でフリゲート艦と合流するよう命じた上で、ヨーロッパ情勢の情報を得るために上海に派遣。

二月一日、三隻はすべて無事に大琉球島に到着、ナパキアング港に投錨。同月五日スクーナー艦ボストーク号も到着、一二月七日付けのヨーロッパからの情報を我々にもたらした。

ナパキアングでペリー提督艦隊のアメリカの士官一人と数人の水兵に出会う。ペリー提督は我々の到着から二日前に、中国から江戸に向かう途中で当地に立ち寄ったのである。士官は我々に文書を見せたが、そこ

には、琉球諸島は、日本政府がいくつかの要求を満たさないことに対する報復として、合衆国の支配下に入ることが記されていた。これらの島々は、日本政府に貢納することでその庇護下にある。その後でフリゲート艦で到着した町の支配者は、島々に対する日本のものだとされている影響を反駁し、最近では日本に少しも依存しておらず、むしろ、中国に朝貢していると言ったが、当地に住んでいるプロテスタントの宣教師が明言したところによれば、琉球諸島全島はすべて將軍の最有力家臣のひとつである薩摩公に依存していて、薩摩公は、後継者が十五歳で成人し新しい支配者になるその度にその者に権力継承権を認めてさえているという。

島に際立って特徴的なことは、すばらしく穏やかな気候と実り豊かさ、平和的で穏和な住民が住んでいることで、彼らは日本人や朝鮮人と顔の特徴がかなり似通っている。琉球人は、他の産物の中でも特に大量の米を日本に送っており、日本では琉球の米が日本産よりも好まれている。

町の支配者と贈り物を交わした後、彼に文書を渡し、その中で私は、ロシア船舶がナパキアングに来た時は欲待し、必要に応じて、交易関係に入って欲しいと要請した。しかしながら、彼は確答を与えることを躊躇し、この申し出に対して、この島には日本のスパイがたくさんいてその影響が大きいという宣教師の断言を理由に、言葉を濁した。

二月九日に抜錨し、我々一行はマニラ投錨地まで無事に航海をし、同地には同月一九日到着した。スクーナー艦ヴォストーク号はナパキアングから、パナフィン中尉【前出参照】が発見したボロジノ島を測量するため派遣されたが、同艦に課された任務を無事に終え、二月二三日マニラ投錨地に到着した。⁽¹⁰⁾

ロシア海軍軍人の琉球滞在についての、恐らく、最も詳細で、生き生きとし、文学的価値が高い記述は、著名なロシア人作家で、E・V・ブチャーチン提督の秘書として、個人的にフリゲート艦パルラダ号の航海

に参加したイワン・アレクサンドロヴィチ・ゴンチャロフであろう。その著作『フリゲート艦パルラダ号』の中の一章全編にこの出来事が詳細に描かれている。とはいえ丸々一章をここに引用するのは適当でないの⁽¹¹⁾で、我々の目から見て最も有益な箇所のみを幾らか引用することにしよう。

「この二日間には強い激しい風が吹いたが、ようやく静まり、我々は珊瑚礁の先の碇泊地に向かうことができた。(中略)甲板に出てみると、海岸が目の前に見えた。それは、既に仕上がり、出来上がった絵のように突如出現し、美しい海岸線が気まぐれに切り立ち、色彩の中に、輝きの中に、魅惑的な細部を見せている。(中略)」

灰色の二つの珊瑚礁の岩が海岸からぐつと突き出し、海の上にかかっている。そのうちひとつのつべんにはプロテスタント教会の屋根が見え、それと並んで、鬱蒼とした草むらや茂みの中に、円筒や半球や楕円といった様々な形の大きな石の塊がどっしりとのぞく。遠くから見ると建物だと勘違いする。そのくらい大きいのだ。これは墓碑だ。さらに右手に岸は再び海に向かって少し張り出しており、小山になったり、潮が満ちると水面下に落ちる海拔の低い砂浜となったりして延びている。珊瑚礁はほとんど海岸の下に沿って走り、その合い間から波が碎ける。ところどころ水面から岩が突き出ている。引き潮の時は姿を見せ、満ち潮の時は隠れるのだ。(以下略)⁽¹²⁾

次が島と住人に対する作家の第一印象である。

「琉球諸島、我が国の古い地理書では、「リュウウキエウ」、外国人たちは「リュウウチュウ」、住民はというと「ドゥウウチュウ」と言っている島はいかなるものであるか。(中略)そう、これは、太平洋の無尽蔵の水の間に投げ出されている牧歌なのだ。(中略)すべてはあたかも、ワトーの絵か、舞台装飾のように、整然と計算され、整理され、美しく配置されている。(中略)」

先へ進めば進むほど、ますます目を疑った。木々の間には、まさに絵のように、茅屋が密やかに立っている。茅屋は珊瑚の石塀に囲まれているのだが、非常にしっかり組まれているため、どんな大砲であれ、この要塞の前では躊躇しそうであった。しかもこの塀は茅屋を守るためにのみあるのである。(中略)

目に映るもの皆見とれたが、目を見張ったものは、熱帯植物でも、暖かく柔らかく、芳しい大気でもない。これらは皆、他の土地にもある。森、道、小道、庭園の持つ秩序と整然さ、衣服の簡素さ、老人たちの家父長的で威厳のある姿、彼らの厳しく思慮深い表情、若者たちに特徴的な優しさと慎み深さ。同様に、驚かされたことは、どんなにか労力を使つたに違いない土木や石造りの仕事の数々。これは、蟻塚、あるいはまさに、牧歌の国で、古代人の生活をそのまま切り取ってきたかのように見える。よそではおぼろげな伝説が、ここでは、現代であり、紛れもなくまさに現実である。ここではまだ黄金時代が生きているのだ(以下略)⁽¹³⁾

著者は、アメリカ人が琉球にいたことについて次のように記している。「米国人、あるいは日本人が名付けるように合衆国人ともいうが、彼らは、我々が到着する二日前に当地を出発したが、具合の悪い水兵たちと二人の士官、そして彼らとともに文書を残し、その中でアメリカ人たちは、自分たちは日本人のくびきに異議を持っており、それに対抗しこれらの島々を米国の保護下に置いたことを他国の艦船に通告し、ゆえに、他国は手出しをしないでほしいと要請した。アメリカ人たちは石炭保存庫まで作り、その後、合衆国人たるペリー提督は日本に向けて出発した。(以下略)⁽¹⁴⁾」

その時期の島の中心であるナバ(著作本文にはそう書かれている)の街を訪れた印象を次のように語る。

「我々は門を通り過ぎた。前には尽きることのない広い通り、あるいは、今までと同じ道が延びているのだが、今までと違って、大きな珊瑚で舗装されず、街道のように、小さな石が敷き詰められていて、両側は、すばらしい樹木の植えられた庭園あるいは公園が続いている。石垣からは、ところどころ、赤い瓦の屋根が見える。(中略) 我々は、大股でさらに先へ歩いて行つた。通りが左に折れたところで、宮殿の前に出た。

それは石の大きな塀のある城砦だった。高さはおよそ四サージェン【一サージェン＝二・一三四m】、ところどころ、苔や蔓植物に覆われている。幅が広い石段は、荒削りな造りだが、がっしりと板が建て付けられた高々とした玄関に導いてくれる。門の両側には、台座の上に、スフィンクスによく似た、珊瑚石の動物が鎮座している。(中略) 門は、片側に、長崎で見たような衛兵所のような木の回廊がしつらえてある。回廊の中では琉球人が真座に正座している。たぶん王宮の召使であろう。やはり彼らも身じろぎもしない。まるで石で作られたみたいだ。(以下略)

何箇所かで滝が滴り、かすかな音をたてていた。向こうには塀に囲まれ、池をめぐらしたお堂がある。遠くには、狭い、だがまっすぐな通り。山の上や斜面に点在する家と小屋の屋根。これは、まさしく古代世界の「苦屋と住処だ」⁽¹⁵⁾」

この後も、ゴンチャロフは、島の散歩や宣教師たちに会ったことについての詳細な記述、琉球諸島の政治体制についての考察、島民たち、その習慣、心性等についての彼の第一印象を続ける。これらは、皆、興味深く、有益である。その時の出来事の目撃者であり参加者である者によって書かれているので、客観的に当時の琉球の現実を反映しているからである。以上広範囲にわたってI・A・ゴンチャロフの作品を引用したが、それが本論考に適切であるのは、上記の理由と同時に、その書籍の出版は海軍省からの資金提供によるものであり、ロシア国立海軍文書館の

フォンドにそれに対する文書証拠があるからである。

我々が知る限りにおいて、ロシア艦船が一八五四年琉球諸島ナバキアング(那覇)港に立ち寄ったことは、ロシア帝国と琉球王国との最初で最後の公式接触である。結果として、米国人が琉球諸島を確保しようとしていたことについての信憑性ある情報が得られた。このことは、ロシアをして、さらに一層、日本との互恵的な条約の締結を急がせることになった。(翻訳・有泉和子)

[注]

- (1) Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. СПб., 1896. Т. XVII. С. 676.
- (2) Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера 1799-1815 гг.: сборник документов. М., 1994. С. 78.
- (3) РГАВМФ. Ф. 166. Оп. 1. Д. 3962. Л. 3.
- (4) Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера 1799-1815 гг.: сборник документов. М., 1994. С. 100.
- (5) Круzensигерн И. Ф. Путешествие вокруг света в 1803, 1804, 1805 и 1806 годах на кораблях «Надежда» и «Нева». Ч. 1. СПб., 1809. С. 337.
- (6) Головинн В. М. Записки флота капитана Головинна о приключениих его в плену у японцев в 1811, 1812 и 1813 годах. Ч. 3. СПб., 1816. С. 153-155.
- (7) РГАВМФ. Ф. 296. Оп. 1. Д. 75. Д. 212-213.
- (8) Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского севера 1815-1841 гг.: сборник документов. М., 2005. С. 103, 104.
- (9) РГАВМФ. Ф. 4. Оп. 1. Д. 88. Л. 22 об.
- (10) Морской сборник. Т. XXIV, № 10. СПб., 1856. С. 60-62.
- (11) Гончаров И. А. Фрегат «Паллада». Л., 1986. С. 492-501.
- (12) Там же.
- (13) Там же.

(14) Там же.

(15) Там же.

(i) 【 】内は翻訳者の注。以下同様。